毎日歌壇

加藤　治郎　選

改札の前で落ち合い改札の前で別れるやわらかな雨　河内長野市　今野　浮儚

△評▽改札前はいつもの場所だろう。2人の時を過ごしてまた別々のところに帰る。結句に満ち足りた気持ちが感じられる。

心から言っていないとあなたにはばれていたんだ靴に滲みる雨　横浜市　友常　甘酢

△評▽あなたに言った言葉が悔やまれる。雨で靴が冷たい。心情の比喩になっている。

祖父の声だけがとおくて思い出の家族はときどき無音でわらう　八尾市　瀬戸口祐子

読み終えた活字が次々生を得て動き出すから賑やかな夜　京都市　小川　ゆか

あなたから言い出すことはなかったと終わる小説みたいな風を　平塚市　芝澤　樹

今日もまた雲と話をしたくなり生駒の谷の青空を見る　生駒市　宮田　修

クリスタるクリスタらないクリスタるそのように照る回転扉　東京　石川　真琴

早朝の深きみずうみひとときの森林浴をしまう水筒　津市　川原田明子

わざとじゃない終電逃す彼を見て泊めたくなったおっちょこちょいで　東京　二坂　万丈

君が急にいなくなるから夕飯のあとにひとりで桃を剝いている　東京　森本　有

水原　紫苑　選

ナイフよりフォークは軽しひとつとして同じ重さの罪はなかりき　相模原市　髙田　祥聖

△評▽切断するナイフと突き刺すフォークの罪を測るのは神か。存在一つ一つが抱える罪の重さの果てに誰の晩さんがあるのか。

美しの森に入つた獏たちは朝が眩しいことを知らない　東京　池崎冨実夫

△評▽夢を食べて生きるバクたちは朝の美しさを知ったら死んでしまうだろうか。

神さまを描く途中で燃えつきて流星群は滅んでしまう　東京　石川　真琴

暴力的に澄むんだろうな月が冬の大三角の一部だったら　横浜市　永永　キヌ

神さまは話し相手が欲しかった　人たるものの起源はそこに　新発田市　佐藤　榮征

雛菊を咥え架空の庭を行くわたしもはやく嘘になりたい　宮古島市　塩見　佯

長風呂はいけないけれど今晩の月は見事に丸いらしくて　尼崎市　入間しゅか

太陽に目を射られている秋口の山型パンの朝の輝き　東京　河野多香子

死に様を見せては消える星々が回り続けて四十九の秋　川越市　新井　昌広

回数が増えた磨けば磨くほど魂が減っていく営み　豊橋市　太田　貴大

伊藤　一彦　選

弁慶の最期のような豆腐こそ供養をしたくなる針供養　福津市　原田　冬

△評▽日ごろ硬い生地を刺してきた針を柔らかな豆腐で休めて供養するのだが、作者は無惨な豆腐の方に心寄せしてユニーク。

私と世界の距離が近くなる異国の地にただいるだけなのに　横浜市　砂月　七

△評▽「異国」では自分と世界との距離を感じるはず。日本への違和を柔らかに表現。

やじろべえ美しくゆれ軌道とは過去と未来をつらぬく鎖　東京　石川　真琴

ひとりきり見ている月はひとりでも幾多のひとの頭上を照らす　飯塚市　白木　小鳩

月のみが色持つ夜こそかなしけれ寄る辺なき影いよよ濃くして　川崎市　何村　俊秋

一墨に一文字を書きし「月」しばし半紙の上に乾かしており　沼田市　山崎　杜人

激痛でもがいただろうと見つめてる縄文遺跡の頭骨の傷　守谷市　夢　恋　士

処理水を語る手段が数値だけだということに落胆してる　大津市　佐々木敦史

熊さんに御邪魔しますと鈴鳴らし知床を行く土産は無くて　坂戸市　納谷香代子

野菜らと畑で議論す真剣に異常気象の対策如何にと　久留米市　仲　雅則

米川千嘉子　選

ぽろぽろとこぼれた涙は池になり秋風だけが撫でていく母　松山市　丘の紫陽花

△評▽母のつらさや悲しみを長年見てきた作者なのだろう。母の涙で出来た「池」はすでに母自身。作者の悲しみもあふれる。

これからも家族五人で頑張ろう　ママの家族も入れてと孫が　つくば市　小林　浦波

△評▽孫から見れば作者は父方の祖父。母方の家族も同じなのだ。教えられた作者。

工場の夜勤に友はいないけどスマホで笑う吾子を見ている　ふじみ野市　雨雨雨汰

風の中ひそかに秋は来ておりぬわれの秘密もいつか露呈す　仙台市　小野寺寿子

背をなでて「大丈夫だよ」のひと言を声に出さざりしことを悔やめり　大阪市　森川　慶子

慈母により封印され左利き五十肩にて封印破る　古賀市　砂山ふらり

バファリンの効能に知る体には十五種類の痛みがあると　碧南市　江原　冬莉

温暖化関係ないという国がずるずるいまも止めぬ戦争　池田市　黒木　淳子

簡単に「寄り添ふ」といふ人たちを不思議に見つむ宮沢賢治　伊丹市　岡本　信子

くいだおれ人形に昔貼られたり「わて泳げまへん」優勝の夜　堺市　梶田有紀子

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁です。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。